



秋

共二天

其二

^ 5  
6509



85  
6509

東洋文庫

困るやみの端

きくつるはなをたひ

あつめし母よつるまはる

るま侍ふは君子

群りよふ

申の申 秋撰夫采

秋撰

福書

0101860 21920

八

一〇一〇年一〇月一〇日

家内ノ海

江ノ川ノ水ノ清キ事

カキノ味ノ佳キ事

カキノ味ノ佳キ事

カキノ味ノ佳キ事



毒く初

毒菜ノ味ノ佳キ事

帆柱を名取

日の當る隙子

紫の戸へ

投入を先

賑々々

近江

老白

不石

柗鳥

シチ

叢

ヒタチ

野菜

江戸

助宜

八

控筆一葉原の町中りや垣の上 近江 一喃

松色で袴者とききとくとの雨 江戸 素樸

蘭色より正月めきぬ並火燧 イセ 井國

雨雪の二日とハ出ぬむ月うけ 江戸 蕉洞

人の目を帯子並へて馳走に 江戸 逢柙

菊よりおとよけき東のよ ミカハ 抱像

七種也子を抱へ居て若者 ミカハ 汝篁

とあきて山帰中一 備前 小松成 瑞紗

取付り忍びて申ふき根芽 イセ 桂沙

燭持て白く廊下の輝き ミカハ 柗圃

傷む木の端をてけ ミカハ 雪解氷 塞馬

雞の鳴る解と解て 備前 雪の凍 梅裡

雪おいて又一二ほ 備前 雪の春 北年

舞 備前 春の雪 舞嘉

ひる色 備前 春の雪 舞嘉

離ハ 備前 梅の花 舞嘉

舞 備前 梅の花 舞嘉

舞 備前 梅の花 舞嘉

折して先活る手より也梅夢心 二カハ 蓮宇

より嗟てあつり来ぬ也梅もらひ 三岳

起く中名もあつて梅の花 江ノ 青可

海出の雨より中し梅の花 洒入

さして目を愛るてもか 崖の梅 玉翠

梅入て席の出菜屋の手桶系 一冬

前もの頼方もあつす梅の花 我竟

吹きて来て山陰ぬく 梅の花 鳥泔

舞うもさらし思へ 梅は風 ハリマ 一素

お梅やととへて努るき雨 京 朝陽

禁もの中ととせり露の意 江ノ 未木

川筋の曲り目とと柳系 京 太老

上日月のたぐいもさす 柵 イセ 淇石

すり切りし名もや 柵と鬼尾 写木

ひら白つ途より名も今より柵 葉有

岩くらしと遠く志も柵系 ハリマ 耕雲

きりぎりすの音 花の物 潜りて 千々五

ゆきやうき 花の物 柳の音 備前 岱三

川筋の音 花の音 柗の音 藤吉

おの樹の梢の音 花の音 秀介

花桶の音 花の音 梅の音 紀伊

二重の音 花の音 田舎の音 大衆

鶯の音 花の音 鳥の音 江戸 杜葉

鶯大の音 鶯の音 鳥の音 鳥の音 鳥の音

花の音 花の音 花の音 月音

花の音 花の音 花の音 雪音

花の音 花の音 花の音 古眼

花の音 花の音 花の音 大音

花の音 花の音 花の音 雪音

花の音 花の音 花の音 雪音

枯草も雪もあはれす二月は 江戸 一橋

春の日は静かき心もや イセ 高屋古 省古

夢塚の貝壳光る春日 イセ うれ 静春

海色うすめり静かき 下総 智彦き 秀介

春の夜や 下総 夢を 下総 桐雨

知れぬ 上毛 鶯も 上毛 鶯居

明のころ 上毛 月 上毛 の 上毛 影 上毛 乙人

春の 上毛 花 上毛 の 上毛 香 上毛 北洋

遠くハ掃す イセ 春の月 春沙

晴る イセ 心 イセ 也 イセ 延 イセ 東字

几中 イセ ぬ イセ の イセ 子 イセ 昌風

の 大坂 心 大坂 酒 大坂 の 大坂 支 大坂 度 大坂 暮宿

苗代 イセ や イセ 一 イセ 軒 イセ 梅間

今 ミカハ 迄 ミカハ ず ミカハ 序 ミカハ 南畝

菜 イセ 花 イセ 志 イセ 也 イセ 静 イセ 子 イセ 三江

安 イセ 心 イセ の イセ 心 イセ 静 イセ 子 イセ の イセ 夢 イセ 心 イセ 静

端色うすきて帰るる夕維子 采雅

蕨の葉をとりしるやの流る 沙路

ささりりりりりり能くむ 蛙うさ ムツ 貞女

麻も習いふくく 立りり水も 藤 江戸 小圃

形千似ぬ夢をとらるる 田隠し 未繁

這世をいふき日あり 雲居雲 柳川

抱りくとも 夢んて 河もや 海苔二粒 セツ 北案

嫩きい 桃の節白も さらりり イセ 菊仙

海りりり 夢何 桃の林外 江戸 桐重

との枝を折りても 同 桃の巻 秀介

連舞ハと中りみくわ けり 荏 由哲

董ふも 目と 魚くさる 縁水江 兼光

あま 習すて 赤あ 志より 花の宿 曾見

をいふくく 夢 荏あり 花りり まに 荏露



静きなり雨もあまぬ花の葉  
 梅塢  
 雨の音を物々の念心橋へ  
 掬川  
 萩のよもひやのうらみや屋さへ  
 素堂  
 雲中入る鳥の跡は  
 鶉  
 撰く 此日の雲く 小船を  
 李曠  
 玉屋ふれはるの魚や藤の花  
 掬川  
 心の雲はく 舟く 藤の舟  
 一

甚く初

短刀の柄うけえて  
 裕担 驛臺  
 誘引一人と侍をて  
 福善人あり  
 静志  
 碇好りの船留り  
 忍藤上牡丹江  
 夕ニハ 懐瓜  
 先任の代り  
 結せし  
 伊えん江  
 江ヤ 荷子  
 近江  
 暮雨  
 舟の心や二階の雲のかり  
 場あき  
 伊イセ 舟お

杜若活てや 夢さり 浸

京 梅價

赤子の心噴くく 志さり たり

江戸 赤牙

ひろもろり 垣うら 見さす 夢心

イ六 佛兄

喜林干 とり 夢さり 裸山

夕六 野楊

雁心 命一 抄 糸や 者さ 中

リ柿 袋

花袖 寄る 夜干 踏ぬ 底さ

蓮坊

雨あ 干 浮て 糸く や 柿の 糸

不轉

菊玉 指 大 玉 寄 雨 傳 也 美 楓

京 芽英

こころ 一 傳 寄 也 夜 本 立

イ六 波文

門内ハ 勢 寄 たり 夜 本 立

挿川

花と 寄 川 の 心 一 寄 也 昔 本 立

挿嘉

竹の子 也 雨も 寄 たらぬ 椽 の 下

アキ 三菖

竹の子 寄 伸 也 橋の 小 寄 たり

江戸 丁吉

竹の子 也 夢と 延 寄 たらぬ 寄

イ六 稲居

河と 先 寄 雨のお 寄 たり 寄 寄 寄

新嘉

東雲と 寄 寄 と 寄 寄 也 時 寄

挿川

一切や瀧のまきき家もつり  
あつらひとととめさうや初松奥  
扁状もさむてりや書すこせ  
燈火の消滅りさすく様江  
起ききて機嫌のささき柴林江

下総 巴陵  
江戸 白起  
近江 乙也  
江戸 釜史  
山ノ口 岳風

きんごを美てふ言足すりやめ江  
あぢや穢のうへの書お森江  
尺うけとく解て場のあき様江  
五月るや女を帯のささき江  
満てあ。漸あふ一衆月あ  
あ晴てお本海一や暮の月  
あめてま。海のささき一あ山  
極海と田りそのあき義き江

三カハ 卓池  
江戸 庚子  
近江 大橋  
江戸 慈々  
大坂 林首  
梅馬  
イセ 方江  
江戸 史子

もや露も下りる。田植の手邊に 京 芥舎

百合掬て瓶をけりや花の中 カ、 梅室

咲けりともも伸るや百合の花 京 南溪

空陽花や四五折て汲む井のほとり 近江 秀介

何と云も初冬に嬉しき茄子に イセ 春形

と枝と竹と竹や梅の糸 伊弉 梅癪

常尼の字よあらる。馳をけり アハ 有節

花の年の届ぬやうに花葉 アハ 万像

川に橋を架しきく水鏡に 江戸 逸淵

きのよんをわたりをきくす鶴番に 大坂 天巖

ひらりや美く種にぬ雲の阿と イセ 一宵

子子や嬉しい子の阿やうに イセ 一函

りこして忍ぶに軽中川若子に 五千 魚山

明日越山おそりしき火車に イセ 万里

海く出る煙りの消ぬ形を糸 イセ 左淵

ひと洗ひしきも若安し草もの イセ 洒了

庭の草や帷子 暮夏にうらむしき

近江

楓下

すしきさむ 暮夏にうらむしき 暮の露

イセ

九穂

六月やまのこ多き びるの虫

系

茶丸

暑くも 祇園祭の 電燈は

江戸

風郎

雲の影 高き 雲より 雨きなり

雲母

池の 結出 して 雨の 清水は

莫山

松と 栢て うけと うけと 清水は

大坂

祇白

お辰の 風と 雨と 清水は

江戸

呂叟

船の 窓と 雨と 日の子 清水は

秀介

古草と 雨と 雨と 蓮の花

アハ

太巻

蓮の花や 花と 雨と 蓮の花

大坂

松海

伐と 雨と 雨と 蓮の花

不石

夕魚や ついなる 雨の ひより

江戸

壮安

瓜の 巾と 雨と 雨と 雨と

秀介

夕時もろり暮るりり 夕すミカハ 流芝

す京 黙池

月すタニハ 九葉

す京 秀外

人色を出て京 社智

掃市大坂 菅居

蠅赤イセ 五韻

あうイセ 崔叟

鳴舟イナハ 風也

追イナハ 寸風

孝イナハ 二江

来イナハ 韓素

宵イナハ 柳川

中イナハ 秀外

延喜

何處までも白く風ありあきり 上弦 皎雪  
 とをよみあ菜たもねてあきり 呼牛  
 離立—宵ハ何やら寐勞らも 南南  
 千めハ水難端 やも 鳴也 ぬ 永保  
 左編のけこ當蒲足—たりふきは露 下弦 江月  
 す風やあも 掛ハぬ 俗のそ 夕六 蕉夢

八月八日於太清居即興

秀外

一雨ハ毛中—五々り唐之じ  
 出—る 舟中 鳴子ありやむ 掬川  
 うききき道中 驚を無う人て 静素  
 撰ても 落ぬ 據の—も—り 外  
 ぬ 立中—山合の—りき 袋 棚 川  
 退屈き—る—る—る—る—る 鶴 素

机好市ハ云々〜れぬ悪き云々

水やつ〜うち子漏〜井戸か〜

こ〜く留もあ〜子漏〜小兒悪者

素人を召〜とを録也〜馬

川萱のまや〜と〜と十六歳

菊造〜こも〜年海つ〜阿の薬

僕〜と〜き〜と〜を〜を〜る〜露時雨

此志似〜さ〜し〜子信〜あ〜け〜る

女湯ハ物ノ阿比〜こ〜り〜あ〜じ〜し

糸をか〜て〜も〜鳴〜ぬ〜縁〜縁

以多洗〜く〜海〜つ〜〜落〜る〜花〜糸

おもひ〜う〜け〜あ〜う〜ま〜し〜る〜籠〜子

海苔焙〜る〜香〜の〜舞〜干〜つ〜〜日〜習〜方

鏡あ〜ら〜り〜大〜出〜来〜る〜小〜細〜工

技持米〜を〜召〜進〜こ〜り〜金〜を〜か〜〜り〜

鈴〜も〜履〜る〜種〜の〜渡〜ゆ〜り

お

川

素

お

川

素

お

素

お

川

素

お

川

素

お



是夜中一吸つけて身中をききせむ  
 いろとりまきり合むる梅  
 所を中一をききせむと居るの境も  
 多うけさせぬさうく一を丸  
 涼拍のそよるひやうと笑絶て  
 ああうきとせむと恋をがらす  
 連立て者居る居る宵の月  
 花の中へ後す風ふく  
 赤川 赤川 赤川 赤川 赤川

奇事よりいふとやいふ事あり  
 君の志つくりと志ぬらうきさ  
 呪て忽ち海を 嵐がいにさ  
 殊さらけけりふと飛ぶ蝶  
 道より一草履の志あるふも  
 船の着場のあはれうらら  
 赤川 赤川 赤川 赤川 赤川

肖天保七年歲次

丙申仲秋望日上梓

海岳社裡

撰者

鈴木秀外

水野新嘉

橋本掬川



